

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	2019年秋季例会報告
Author(s)	増木, 風佳; 佐藤, 洋希
Citation	『通信』Ⅱ, 6 : 9 - 13
Issue Date	2021-02
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051091
Right	
Relation	



法、「経験」と「生存」の「統合論的アプローチ」という研究視座によって、国家と社会の関連で歴史を把握する研究方法を提示してみせた。

大門氏の報告後、小林氏、三時氏からコメント、フロアから質問、意見が寄せられた。ここでは、それらの内容をふまえ、私自身の関心に沿って考えたことをごく簡単に記しておきたい。

まず1点目は、子どもの側から「生存」の仕組みを考えるということについてである。小林氏からは、小林氏自身の〈不登校〉の歴史と学校建築史とを「生存」の視点でつなげるという研究を通じて、近現代の日本の学校が子どもの「生存」をめぐる、脅かす／守るという両義性の中で揺らぎ続けてきたと整理できるのではないかと論点が示された。それに対して大門氏は、学校と子どもの「生存」の関係を問い直す重要性を受けとめつつ、一方で、学校をつねに影響を与える側に置くのではなく、人々、とりわけ子どもの側からも「生存」の仕組みを考えるというように、相互関係を検討する必要があると応答した。一方で子どもの側からの「生存」の仕組みを考えると、学校との相互関係だけではなく、家族、社会福祉との関係もまた検討の俎上にのせていく必要がある。子どもの側が誰とのどのような関係における教育を経験したのかを学校経験を越えて問うことの重要性を考えた。

2点目は、そもそも「生存」の視点から歴史をとらえ返すことの意味についてである。「生存」の視点からの歴史的考察が内包する困難は、三時氏もまた「両義性」というワードを提示しつつ、しかし小林氏とは違うアプローチとして、そもそも「生存」に内包される両義性を指摘した。三時氏は、「生存」の視点から歴史をとらえ返すなかでみえてくる2つの両義性、すなわち「生存」の仕組みに関する「促進」と「障壁」、誰の「生存」を問題にするのかによって、「生存」構造自体が転換してしまうことをどう受け止めるのかという問いを提示し、さらには、そうした「生存」の両義性、重層性があるなかで、誰かに寄り添い歴史を書くことは可能なのかと投げかけた。大門氏は、歴史家が何らかの形で制約を及ぼすことが含まれていると考えざるを得ないが、その自覚をもってどう取り組むか、たとえば聞き手の役割として、聞くことの中に暴力や負担を与えることがあり、そうした聞き手の側が試されていると自覚しつつ、対象との関係、つながりのなかで取り組むほかないのでないかと応じた。こうした聞き手の姿勢こそが大門氏が考える歴史家の役割であると受け止められる。そうした姿勢は、大門氏によって丁寧に示された同時代史の状況と現在の視点の組み合わせから自分の研究を振り返る作業なしに体得されることはないと理解できる。その一方でそうした歴史家の自覚が少しまぶしくも思われ、語り手や資料など対象の側の矛盾や葛藤が取り残されはしないかと感じた。このことは、フロアから、「生存」は生きているとたまってしもうもの、たとえばお金、地位、名誉が生存でもあるのではないかと、語られなかったことをどう考えればいいのかという問いと重なるものである。語り手や資料に向き合い続けることは、とらえたことととらえ損ねたことをともに発見する作業が必要なのではないか。大門氏がすすめる「自己解剖」から考えてみようと思う。

これまで一読者として比較教育社会史研究会から刺激を受けてきたが、思いきって扉をたたいたら、2回目でこのような報告の機会をいただき、とても感謝している。この場を借りてお礼申しあげます。

2019年秋季例会報告

2018年11月16日(土)に九州大学大学院 人間環境学府 教育システム専攻 教育学調査・資料室にて、2019年秋季例会が開催されました。

第一部は、書評セッションとして、田中友佳子著『植民地朝鮮の児童保護史—植民地政策の展開と子育ての変容』（勁草書房、2018年）、土屋敦・野々村淑子編『孤児と救済のエポック—16〜20世紀に見る子ども・家族規範の多層性』（勁草書房、2019年）の合評会が倉石一郎氏（京都大学）の司会のもと行われました。『植民地朝鮮の児童保護史』に対するコメンテータとして小野容照氏（九州大学）が、『孤児と救済のエポック』に対するコメンテータとして細井勇氏（福岡県立大学）が、そして著者・编者からのリプライとして田中友佳子氏（九州大学・学術協力研究員）と野々村淑子氏（九州大学）が登壇されました。

第二部では、新しい部会として立ち上がった「宗教と教育」部会の第一回セッションが野々村淑子氏（九州大学）の司会のもと行われました。岩下誠氏（青山学院大学）が「アイルランド国民学校制度はいかにして宗派化したか—non vested schoolに焦点を当てて」というテーマで報告され、コメンテータとして草野舞氏（九州大学大学院）が登壇されました。

詳細は以下の報告の通りです。ご参照ください。

比較教育社会史研究会 2019年秋季大会に参加して

増木風佳（広島県立御調高等学校・教諭）

この度初めて比較教育社会史研究会に参加し、勉強させていただく機会を得た。同会は、第一部に書評セッション、第二部に「宗教と教育」セッションに分けて行われた。本報告では、各部の議論概要を記し、少し考えたことを書かせていただこうと思う。

まず第一部では、田中友佳子氏著『植民地朝鮮の児童保護史—植民地政策の展開と子育ての変容—』（勁草書房、2018）に対し、朝鮮近代史を専門とする小野容照氏からコメントがなされた。小野氏は、同書の意義を植民地期朝鮮（1910-1945）の社会事業史研究において「児童保護史」を幅広く跡付けた日本語文献としては先駆的なものであるとともに、児童保護を近代性のひとつとして捉えた試みであるとして紹介する。しかしその一方で、朝鮮総督府の政策といった大きな枠組みのなかでの位置付けの不十分さが指摘された。なかでも、史料と関連研究が社会事業の領域のものに限定されているという方法に係る指摘が、他領域の史料の紹介を通じてなされており、とても興味深かった。こうした、より広範に目を向ける必要性を促す指摘は、続く書評でも同様になされていたように思われる。

土屋敦氏、野々村淑子氏編『孤児と救済のエポック 16~20世紀にみる子ども・家族規範の多層性』（勁草書房、2019）に対しては、細井勇氏からコメントがなされた。同書をもとにしたセッションは、日本教育学会のラウンドテーブルでも行われている。このときは、従来、単線的に

把握されてきた社会事業史研究に向け、非政治的に見える家族を包摂と排除の政治的な場としてみならず試みそのものに対して白熱した議論が繰り広げられていたように思われる。しかし本会では、同書をこれまでの成果（『福祉国家と教育—比較教育社会史の新たな展開に向けて』（昭和堂, 2013）や『保護と遺棄の子ども史』（昭和堂, 2014））の延長として捉え、議論が行われた。ここでも、田中氏への書評と同様、「いかにしてトータルな視点が可能になるのか」として、英米中心主義の傾向や宗教改革に関わる父権主義との関係性について指摘がなされた。

第二部では、岩下誠氏からの報告「アイルランド国民学校制度はいかにして宗派化したか—non vested schoolに焦点を当てて」に対し、草野舞氏からコメントがなされた。「統一学校システム」を構築していくという理念と、宗派化していく実際との齟齬を問うという問題設定を確認しながら、アイルランド、さらにはnon vested schoolに着目する意味について議論が行われた。議論の俎上にあがったのは、主に宗派に関するイングランドとの違いや、アイルランドのなかでの宗派間の違いなどであった。一方、アイルランドの宗派化の事例が公教育制度の展開の歴史において持つ意味など、教育と宗教の絡み合いの内に生じる関係性はどのように描けるか、ということに関しては課題として挙がっていたように思われる。

最後に、書評セッション、「宗教と教育」セッションともに、今回一貫して掲げられていたものは、仮想敵としての「福祉国家」であったことが確認され、閉会した。しかし、「福祉国家」批判に向けた、より広範に、当時の政治的ないし社会的文脈を踏まえる必要性は、これまでも共有されてきた問題意識ではなかったか。事実、前掲の『福祉国家と教育』の段階から、新自由主義時代の教育社会史のあり方として、カニンガムの指摘を引き取りながら「国家を超える連帯への模索がどのようになされたのかを探求する試み」がなされるべきこと、すなわちグローバルな観点から教育史を描いていく必要性について言及されている[315頁]。さらに言えば、こうした問題意識は教育史学会第62回大会のシンポジウム「教育史とはどのような学問か—「60周年記念出版」の検討を踏まえて—」（2019年9月29日、於一橋大学）のなかでも共有されていた。であれば、今回確認された、「福祉国家」批判のなかでより広範な文脈を考えるべきであるという課題について、どのように考えていけばよいのだろうか。つまり、「国家を超える連帯」に着目するという手法をとる以上、幅広い文脈に目を向けざるを得ないことは、至極当然に出てくるはずの課題であるように見え、現在の課題の所在、すなわち現在の課題の所在が分かりづらく思ってしまったのである。

自分自身、複雑な関係性の面白さやその意義を記述する難しさを感じていることもまた、今回の疑問の根底にある。私は第二次世界大戦後の孤児、とりわけ原爆孤児の救済活動に関わったアメリカと日本の人々や団体、双方の思惑の交錯に関心があり、研究を進めている。広範に目を向けようとすればするほど、様々な史料から立ち現れてくる関係性は、因果関係で語ることできるものではなく、多様なアクターが葛藤する様相そのものに思われるが、体系立てて説明することをしようとする、たちまち貧相な記述になるか、整理がつかず飽和状態になってしまう。幅広い文脈の下で見える複雑な関係性の面白さやその意義はいかにして記述し得るものであるのか。

こうした悩みも思い浮かべつつ、より広範な文脈を考えるべきであるという課題をいかに引き取ればよいかという問いに立ち戻って、両セッションの捉え方を再考した。同会では、両セッションともに仮想敵としての「福祉国家」があったことが確認されていたが、むしろ目的を同じ方向に定めていてもアプローチ方法が異なるものとして見直すことができるのではないかと。つまり、問いの立てられ方が異なっているのである。書評セッションにおける問いは、児童保護の領域における個別事例の中間者ないし団体の葛藤に着目するという手法をとることにより、社会全体の関係性に目を向けるべきであるという課題を提起する形式をとっている。これに対して「宗教と教育」セッションにおける問いは、「宗教と教育」という射程を大きく広げた状態で個別事例に焦点を当てるため、社会全体の関係性そのものを考慮せずには検討できないものであるということが、すでに担保された形式をとっていたと思われる。

このように考えると、同会で確認されたのは、幅広い文脈に目を向ける必要性というよりも、こうした意識はすでに前提となった上で、どのようにして歴史叙述に向き合っていくか、問いの立てられ方のいくつかの試みが示されたものであったように感じた。従来の歴史叙述を批判し、

再び歴史を記述すること、言語化することの難しさについて、もっと議論を聞きたかったところではある。しかし、自らの視野を拡大し、複合的に考えていくこと、そこで表れる複雑さに目を向けていくことは、問いそのものを何度も批判し、問い直し続けていく行為なのだということを、この報告文を書かせていただく機会も含め、肌身で感じられた研究会であった。

比較教育社会史研究会 2019年秋季大会に参加して

佐藤洋希（九州大学大学院・院生）

2019年11月16日（土）、九州大学伊都キャンパスに於いて比較教育史研究会 2019年秋季例会が開催された。本研究会は、第一部「書評セッション」、第二部「宗教と教育」セッション」の二部構成で実施された。

【第一部 書評セッション】

第一部の「書評セッション」では、田中友佳子『植民地朝鮮の児童保護史』（勁草書房、2018）と土屋敦・野々村淑子編『孤児と救済のエポック』（勁草書房、2019）の二冊の研究成果が取り上げられた。これら二冊の研究成果について、それぞれ指定されたコメンテーターによる書評が報告され、それに対して著者が応答するという形で本セッションは進行していった。なお、『孤児と救済のエポック』の執筆陣からは、編者である野々村淑子氏（九州大学）をはじめ、各章の執筆を担当した乙須翼氏（長崎国際大学）、草野舞氏（九州大学）、田中友佳子氏（九州大学学術協力員）が出席した。

まず、田中友佳子『植民地朝鮮の児童保護史』に対する書評が、小野容照氏（九州大学）によって報告された。小野氏は、本書の意義の一つとして、韓国の植民地期にみられる「児童保護に関する近代知識の、諸団体から朝鮮人への伝播、慣習との葛藤」が明らかにされている、すなわち、近代的知識の受容史研究として「伝統社会の近代化（文化衝突）」を「児童保護」を軸として描き出すことに成功しているという点を挙げた。この点は、田中氏が本書において掲げる大きな課題の一つであった。本書の中で田中氏は、これまでの「植民地近代」研究には、啓蒙する側とされる側両者の間を取り持つ「介在者」の働きへの着目が不足していることを指摘していた。この「介在者」の登場する場面を詳細に検討することによって、「新しい知識」が朝鮮人の間に持ち込まれたときに起こった衝突や葛藤、そして受容の様相を鮮明に浮かび上がらせ、「近代的なるもの」が朝鮮に流入する過程の複雑さを描き出すことが本書のねらいの一つなのであった。その描出に成功した点が本書の意義であり、オリジナリティとなっているという点が、議論の中で、筆者と評者の間で共有された。

次に、土屋敦・野々村淑子編『孤児と救済のエポック』に対する書評が、細井勇氏（福岡県立大学）によって報告された。細井氏は、本書を、「家族は非政治的な親密圏として公共圏から遠くように一見見えるが、家族こそが包摂と排除の政治的な主題となって浮上している」という観点からなる比較教育社会史研究の延長線上にあるものとして位置づける。この観点から、英米を中心的な対象として取り上げ、既存の研究を脱構築する試みが各章の執筆者によって試みられている労作として、細井氏は本書を受け止めていた。更に、本書の中では、「植民地下の朝鮮の孤児救済実践」や「アメリカでの日系移民の貧孤児救済実践」が取り上げられており、孤児救済の全体像の構築のための一国の枠に収まらないトランスナショナルな視点の重要性を示した点にも本書の意義があるということが細井氏によって報告された。

第一部のセッションを通して、私は、人々の生活や心性を描き出そうとする社会史の試みにあって、「介在者」に着目し、その動向を描出することの意義を強く感じた。例えば、1900年代前後の日本における就学率の上昇を対象とした研究にしばしばみられるように、国家政策のもたらした社会へのインパクトは、人々の生活の変化と照らし合わせることによって、検証されることがあるように思う。だが、この方法では、政治の中枢からの、必ずしも直線的であるとはいえない、人々への伝達過程の複雑さを見落としてしまうことがある。これに対して、田中氏が主張

するように、より人々に近い存在である「介在者」による人々への伝達に焦点化することによって、人々の生活や心性をよりリアルに描出することが可能になるのではないだろうか。このことは、社会史という領域において非常に重要なことであるように思われる。

【第二部「宗教と教育」セッション】

第二部の「「宗教と教育」セッション」では、岩下誠氏(青山学院大学)によって、「アイルランド国民学校制度はいかにして宗派化したか—non vested schoolに焦点を当てて」と題する研究報告が行われ、それに対する草野舞氏のコメントから議論が展開されていった。岩下氏の発表は、タイトルの通り、アイルランドの国民学校制度が宗派化していく過程をその複雑さと共に描き出すことをねらいとしていた。私はこの時間他の作業に追われていたため、発表内容をここで詳述することができないが、手隙のときにとったノートを頼りに印象的だったことについて書いてみる。

草野氏がコメントの一つとして「この時代、子どもがどういう存在として考えられていたのか」という旨の質問をされていた。国家にとって、それぞれの宗派にとって、子どもとはどのような存在だったのか。こういった子ども観が、学校がどうあるべきかという議論の根幹に関わっているのではないかと、ということが草野氏によって示唆されたと言える。すなわち、学校制度の輪郭が形成されていく過程を、その時代の子どもの観と併せて検討することによって、その複雑さ(今回では、宗派化という過程の複雑さ)を理解することに近づくことができるのではないだろうか、ということである。翻って考えてみると、その時代の子どもの観なるものは、学校がどうあるべきと考えられていたのかを検討することによって、明らかにすることが可能なのではないかととも思われた。日本では1990年代以降、制度史中心の教育史を乗り越える試みとして盛り上がりを見せた教育社会史であるが、学校制度をはじめとした諸制度を検討することによって制度史的な関心に収まらないものが見えてくるのではないだろうか。その広がりを感じたセッションであった。

連絡事項

皆様のご協力のおかげで、新しい方や院生の方も増えてきました。本研究会は、いろんな領域の研究者が集まって議論することを大事にしている会です。さまざまな方に興味を持っていただける企画を立てていこうと思っておりますので、ぜひ皆様からの忌憚のないご意見、企画をお待ちしております。

また引き続き、研究活動の活性化のためにも、ぜひ、教育の歴史に関心のある院生さんをご存知の方がいれば、この研究会を紹介していただければと思います。

この点に関わらず、ご意見等ございましたら、下記の連絡先までお寄せ頂ければと思います。

また、『通信』IIは年一回発行で大会報告を行う予定ですが、研究会メンバーが執筆された著書や留学体験などの情報・記事も載せていきたいと考えておりますので、何かございましたら遠慮なく、お知らせください。